

未来へつなぐ

Education for
Sustainable Development
Coordinator Project

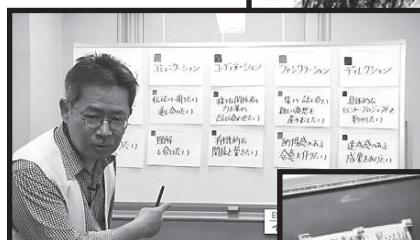
no.4

発行日：2013 年 9 月 20 日

発行：認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）



OJT型研修



映像教材



コーディネーターのスキルアップとネットワーク②

新しい人づくりの仕組みで 学びあいと地域づくりの新展開へ

地域や社会の課題を知りそれを解決していくための学びあいが ESD。そのためには学びや参加を促したり、学習や地域づくりのプロセスづくりをサポートしたりする役割が必要になってきます。そんなコーディネーターとしての役割を、地域やその場に応じて、実際のプロセスから学び〈OJT 型研修〉、理論や方法、事例を効率よく共有していく〈映像教材〉ためのチャレンジが始まっています。

具体的には、ESD コーディネーター育成の取っ掛かりになる映像教材と、北九州、広島、岡山、茨城で、その場に即したコーディネーター育成のプログラムが成果として得られようとしています。これらを活用して、皆さんの地域・場にあった人づくりをトライアルしてみてください。失敗から学び、成果を共有し、学びあいと地域づくりの新展開へ、これまでの殻や枠を超えて元気に踏み込んでいきましょう。

Contents

- p2-3 ビデオ教材制作スタートしました
- p4-5 「未来へつなぐ」ツボの共有に向けて
- p6-7 コーディネーター研修の現場から③「地域とテーマの幸せな出会い」(広島)
- p8 編集長レポート 埼玉にひろがる地域コーディネーターづくり



ビデオ教材制作スタートしました

2013年8月、ESD コーディネータープロジェクトで制作してきた9本の映像教材コンテンツが、ESD-Jのウェブサイト「未来へつなぐ」とYoutubeに公開されました。この映像制作に企画からかわってこられた川嶋直さんと森高一さんに、このプロジェクトの目指すところや期待などについてお話をいただきました。

森：いよいよ第一弾の映像教材がウェブにアップされましたね。川嶋さんは、これまでコーディネーター養成にむけた検討に関わってこられたわけですが、ビデオ教材という動画配信の可能性をどうとらえていますか？

川嶋：ESD コーディネーター養成に限らず、環境教育や開発教育ではこれまで集合型の研修（通称：集合研修）が中心でしたよね。人が集まって何時間かあるいは何日か一緒に講義を聞いたり、ワークしたり議論をしたりすることにももちろん大きな意味があるのだけど、参加できるのがその日程に来られる人だけだったり、費用の面で参加できなかったりという面もあったと思うんです。だからこのプロジェクトでは、「**本当に研修に参加してもらいたい人たちに研修を届けたい**」、そんな思いを大切にしているんですね。

森：そもそも、ESD コーディネーター養成講座の対象者って、どういう人たちが想定されているんでしょう？

川嶋：ESD コーディネーターとして活躍できる現場を持っている人に来てほしいと思っています。でもそういう人たちは、何日も現場を離れることが難しいじゃないですか。一方で養成のプロセスについては、集合研修の後に現場のOJTを挟んでまた集合するスタイルがいい。だから、集合研修のハードルを

どうやって下げるか、つまり集まらなくてはいけない時間を短縮することが大きな課題だったわけです。

森：現場で活躍する人を集めてさらにモチベーションやスキルをあげていこうという研修なのに、その時間を十分に確保するのが難しい。ジレンマですね。

川嶋：現場をもっていないと参加できないというように門戸を狭めるつもりはないのだけど、ただ「教養」として身につけておきたい人よりも、実際に現場でESDに関係する活動をしている人や、今後そうした場に関わりたいという意志を明確に持っている人たちを対象にしていきたい。確かに集合研修は大事、だからその貴重な時間を、集まったからこそできる最大限の形に生かしたいじゃないですか。あえて全員で講義を聞く時間をつくる必要はないんじゃないかと。「必要な基本情報は集まる前にインターネットで見ておいて」とするだけでもだいぶ違ってきます。集合研修は議論をする場であって単に情報を伝える場ではないと割り切ることで、よりいい成果が得られるんじゃないかという発想なんですよ。

森：そうすると多くの人が事前に情報を得ておくのが有効。ネット環境ならできますね。

映像コンテンツ

ご紹介



志を持った人をつなげることはすごく楽しい

○ミッションムービー

なぜESDに関心をもったのか、ESDにはどんな力があるか、ESDに取り組む現場の人から生の声を集め、今なぜESDに取り組むのかを多くの人に伝えたいと作成しました。



ESDコーディネーター4つのチカラ
イントロダクション

○ESDコーディネーターに必要な4つの力

コミュニケーション、コーディネーション、ファシリテーション、ディレクション。カタカナ用語がよく使われますが、ESDを進めていくのに関係する4つの言葉を、たとえ話を使いながら整理しました。川嶋直さんのKP法でお伝えします。

川嶋：そこでビデオ教材のアイデアが出てくるわけです。アメリカのカーンアカデミーというサイトや、ハーバード大学などが著名な講師の講義を録画して、どんどんウェブにアップしています。カーンアカデミーは、数学の家庭教師の授業を単元ごとにビデオに撮ってウェブで教えたのが始まりで、今では世界的に広がりました。一単元は数分以内ととても短く、それが体系的に集まって構成されている。それがインターネットで誰でも見ることができるんですよ。

森：今回はまず体系的な整理を検討して、はじめに撮れるものを撮ろうということで、**3種類・9本のコンテンツをつくりました**。これがはじめの一步、これから増やしていかなければなりませんね。

川嶋：この体系も、つくっていくうちにコンテンツ数も増えていって、拡大したりどんどん更新されたりしていくといいですね。

森：**1コンテンツは5分程度と短くしました**。あまり長いと見るのが大変じゃないかと。今回は映像制作のプロに入っていたいただきましたが、今や誰でも動画サイトに投稿できる時代。これから多くのコンテンツをどう拡大していくかがポイントになりますね。

川嶋：ウェブの動画は、PC環境があればいつでもどこでも何度でもどのコンテンツからでも見ることができる、という点でもいいと思っています。ただ、対面しているわけではないから当然双方向ではないし、質問もやり取りもできない。そこは集合研修に求めたいところ。だから、ウェブ動画がみんなで集まる際の時間の有効活用につながればなど。あるいは、集合研修の場でこの動画を使ってもらえるのもいいですね。**みんなで同じ動画を見てそれを教材にして話しあうとか、様々な活用方法を考えていただけると嬉しい**。



○ ESD コーディネーターのお仕事

ESD コーディネーターという立場の人はどんなことをしているのか、どんな場所で活躍していて何が大事なのか、実際に東京・杉並区で活躍されるコーディネーターをゲストに、現場の実情をインタビュー形式で紹介します。聞き役は森良さんです。

森：ウェブにアップしたことで、これまで ESD にまったくタッチしていなかった層にも波及できるんじゃないかという期待もありますね。

川嶋：それももう一つのねらいですね。

森：できるだけ一般的な言葉をあえて使っているし、タイトルも難しくならないように工夫しました。**今後の拡充では、具体的なスキルやひと工夫のコツ**というようなものも入れられるといいし、ESD に限らずいろいろなところで求められるものになっていくんじゃないでしょうか。

川嶋：ネットで偶然このサイトを見つけて ESD に関心を持つ人が現れるというのも期待したいけど、より多くの人の目に触れるものになるといいなと思います。

森：第1弾公開コンテンツは、川嶋直さん、森良さんはじめ ESD の関係者が出演してくださいました。第2弾の制作も検討していますが、多くの人に参加してもらいたいですね。

川嶋：そう。予算の問題もあるけど、できるだけ多くの人が使えるものにしていきたい。そのためにも、皆さんが ESD の現場で使っているノウハウを隠さずどんどん公開してほしい。つくり上げるプロセス自体もたくさんの人たちの協働で進めていければと思っています。みなさんのご協力と活用、そして拡充をお願いしたいですね。それから、「この映像教材を使ってコーディネーター研修をしてみたい!」というご相談も大歓迎。ぜひ、ESD-J 事務局までご連絡ください。



森 高一 (もり こういち)

環境コミュニケーションプランナー。1998 年東京ガス・環境エネルギー館の立ち上げで運営企画ディレクターを担当。その後、2004 年ストップおんだん館のプロデュース、2011 年～オール東京 62 エコプロダクツ出展の企画など、環境コミュニケーションをテーマとした現場づくり、人づくり、モノづくりを中心に活動。大妻女子大学、大正大学で非常勤講師をしつつ、現在立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科に在籍中。



川嶋 直 (かわしま ただし)

(公益財団法人キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー)

1980 年山梨県清里のキープ協会に就職。84 年から環境教育事業を担当。インタープリターとして、自然の中での参加体験型の環境教育プログラムの開発・人材育成を行ってきた。2010 年にキープ協会役員を退任後は、KP 法 (紙芝居プレゼンテーション法) を駆使した研修ファシリテーター、企業・行政・NPO の環境教育アドバイザー。日本環境教育フォーラム常務理事。自然体験活動推進協議会理事。日本環境教育学会理事。



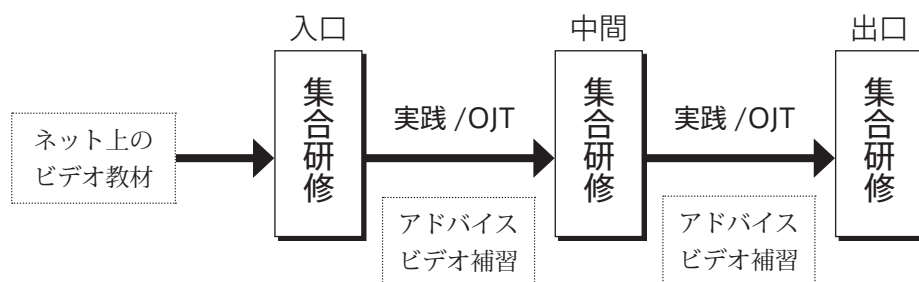
「未来へつなぐ」 ツボ の共有に向けて

ESD コーディネーター・プロジェクト担当理事 壽賀 一仁

2009 年の「ESD コーディネーター育成のあり方に関する検討会」から議論を積み重ねてきた ESD コーディネーター・プロジェクト。これまで、各地ですでにそれぞれの立場で活躍されているコーディネーターの方々に、社会の課題の学びを促し、地域づくりのプロセスをサポートする ESD の視点を共有していただくアプローチの具体化を目指してきました。いよいよ、来年の「ESD の 10 年」最終年に向けてラストスパートに入ります。

ビデオ教材制作の紹介文にある通り、このプロジェクトは、学びあいと地域づくりの現場からスキルアップに有効な ESD 的視点やコーディネーションのノウハウを抽出して共有するとともに、それらを活用した効果的な ESD コーディネーター育成研修のエッセンスを広く公開していくものです。そして、それぞれの地域づくりのプロセスのなかで、これらのノウハウやエッセンスをできるだけ多くの方々に活用・拡充していただくことを通して、ESD の視点を持ったコーディネーターが活躍できる仕組みづくりの重要性に対する理解者を全国各地で増やしていくことを目指しています。

これまでの議論と昨年の活動のレビューから、効果的な ESD コーディネーター育成研修のエッセンスとして、次のような組み立て方が見えてきました。



2013 年度は、各地で実施が計画されている上図に類似した複数の研修を実証的に検討し、それらの研修の組み立て方やコンテンツからより多くの有効な視点やノウハウを抽出して、効果的な ESD コーディネーター育成研修のエッセンスへとフィードバックしていきます。また、ビデオ教材については、前ページの紹介の通り第 2 弾、第 3 弾とコンテンツの拡大を予定しています。

集合研修とその学びを実践する OJT を繰り返す、上図の組み立てによる研修の実証的な検討には、昨年も参画いただいた北九州と岡山の研修企画・実践者に加えて、今年は広島と茨城での関係者にもご協力いただきます。それぞれの地域の文脈に即したこれらの研修は、その名称にかかわらず、実質的な ESD コーディネーターの育成を意図した興味深いプログラムとなっています。また、地域課題の取り上げ方やコーディネート力の向上といった個々の能力強化のみならず、研修後も参加者同士がサポートしあえるフォローアップのためのネットワーク構築を重視していることも特徴です。これらの事例を関係者が集って一緒に検討することで、研修に有効なより多くの視点やノウハウを引き出すことができると期待しています。

効果的な ESD コーディネーター育成研修のエッセンスとは、持続可能な社会を「未来へつなぐ」ために押さえるべきツボといえます。このプロジェクトによるその抽出・共有・公開の試みが、皆さんによる活用・拡充へとつながるよう、一生懸命取り組んでいきますので、応援よろしくお願いします。

今年の夏から冬にかけて、4 地域で計画されている OJT 型研修の概要は次ページのとおりです。（ひと足早く実施が始まった広島は、6-7 ページをご覧ください）

北九州

ESD 未来創造セミナー ～ ESD コーディネーター育成並びに修了者サポート事業～

北九州市では「環境未来都市」の実現に向けて、持続可能な社会づくりを進めています。昨年度は市と当法人が協働でその核となる人材育成を目的に、ESD コーディネーター育成講座「ESD 未来創造セミナー」を実施し、40名の修了者が誕生しました。

次のステップは、その修了生が中心となって地域で ESD 活動が実践されることです。そのためには、ESD の知識やコーディネート力のさらなるスキルアップを図るとともに、地域の多様なステークホルダーをつなぎ、地域の課題解決のための効果的な協働を生み出し、具体的な活動につなぐ力量をつけることです。しかし、実践活動を進めるには困難や障壁はつきもの。研修・相談機能を含むフォローアップ体制「駆け込み寺」が必要です。

そこで、本年度は第2期「ESD 未来創造セミナー」と併行して「修了者サポート事業」を実施します。この両事業は相互に関連性を持たせ、修了者が新規受講生のフォローを行い、さらに実践者同士の情報交換や励まし合い、スキルアップの場、ひいてはコーディネートネットワーク構築の基礎となることを期待するものです。

三隅 佳子（みすみ よしこ）

NPO 法人 北九州サスティナビリティ研究所 理事長
（北九州 ESD 協議会 副代表）

北九州市で女性初の民間採用での管理職となり、市民局女性行政推進部長などを歴任し、北九州市立男女共同参画センター・ムーブの初代所長。（公財）アジア女性交流・研究フォーラム評議員、UN Women 日本国内委員会副理事長



岡山

地域のみかた ～ 公民館職員のエンパワメントによる地域力向上～

岡山市では、これまでも ESD の地域拠点である公民館職員を対象とした研修を実施してきました。しかし、参加できている職員の偏りや共通の基盤づくりが課題となっていました。

今年度は、市内 37 公民館から 1 名以上参加する研修と位置づけ、職員自らが地域のコーディネーターとして活躍するとともに、地域住民の中にもコーディネーターを育てていくためのスキルやコーディネーターとしてのあり方を身につける研修とします。

今回の研修で特に押さえない点は、地域にある様々な課題や資源の中から、取り上げる課題の「見立て」やコーディネーターの「視点」です。それを各自が踏まえた上で、自分の事業を見直し、評価、分析、改善案を出し、次年度に向け新たな企画に取り組むような OJT 型研修を計画しています。公民館職員のみを対象とすることで、各公民館で実施している ESD 事業を持ち寄り、論理的且つ整合性の取れた企画の立て方などの基礎部分のレベルアップも図っていきけるような研修を計画しています。

重森 しおり（しげもり しおり）

岡山市立中央公民館 主任（社会教育主事）

就実大学で社会教育主事補の資格取得し、2000年、御津町教育委員会で社会教育主事補として採用。約3年間社会教育係社会教育主事として勤務。2005年に岡山市と合併後、2008年から岡山市立中央公民館指導係勤務。5年目。



茨城

共創空間をコーディネートする人材と ESD センターをつくる

茨城地区では、廃校、空き店舗、遊休施設などを活用して参加や学びの拠点を増やすことと、その場に集う人や組織をコーディネートする人材の育成をテーマに研修を行います。

少子化で廃校が増える一方で多くの市民団体は、安定的に使える活動拠点の確保や市民との接点づくりを課題にしています。そこで、実際に企業が管理する施設を舞台に、多様な市民団体が集う場をデザインし、周辺の地域課題を共有しつつ、各団体の強みを組み合わせた事業を組み立て、互いがもつ時間やノウハウを組み合わせる公共空間をつくるという実験を展開します。

このような「みんなの場」を拠点に、市民参加と組織の協働と課題解決事業を生み出す人材を私たちは共創空間プロデューサーと位置づけ、協働実験を通じて担い手を増やしていきます。地域資源や課題の発見、担い手の発掘とチームづくり、協働事業の立案実行、多様な主体の巻き込み、拠点の維持管理、といったタスクを行いながら、実践ノウハウを培い、コーディネーターの役割や手法が見えるようにしていきます。

横田 能洋（よこた よしひろ）

茨城 NPO センター・コモンズ常務理事

茨城県経営者協会で企業 CSR の推進業務を行ったのち、1998年に仲間と市民設立の中間支援組織を立ち上げ、組織の運営支援や、セクター間の協働促進、障害者、ニート、外国人などソーシャルインクルージョンに関する活動に取り組んでいる。



地域コーディネータースクール「地域とテーマの幸せな出会い」 ～既存のコーディネーターとつながる取り組み～

環境教育事務所 Leaf 代表 河野 宏樹

1. はじめに

今回 ESD コーディネーター研修を広島地区で行うことになり、これまでも岡山市などで ESD の研修に数多く携わっている人間科学研究所の志賀誠治さんと、広島を中心としたまちづくり事業に関わっている NPO 法人ひろしまジン大学の平尾順平さんと議論を重ねました。この中で浮かび上がってきた課題は以下のような二点です。

- ① 優れたテーマの設定により事業の盛り上がりはあるが、どこでもできるような、地域性に乏しい事業がコーディネートされている場合がある。
- ② ①と逆で、地域に密着した事業ではあるが、マンネリ化しており新しい切り口やテーマ性に乏しい事業がコーディネートされている場合がある。

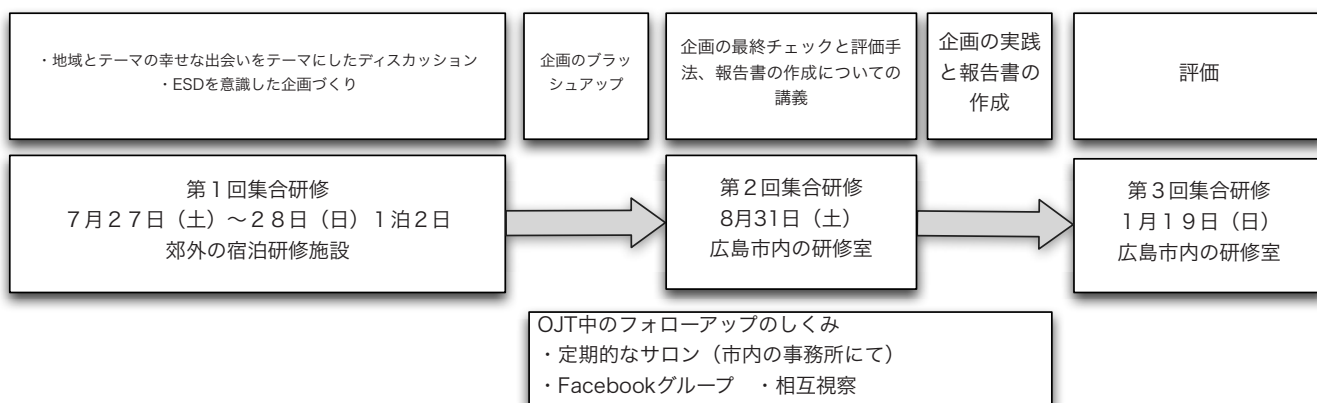
そこで今回の研修のテーマとして「地域とテーマの幸せな出会い」を設定しました。ESD の事業を展開していく上では「地域性」と「テーマ性」の両方がうまく出会っていく必要があると考えています。上記のような課題が発生しているのは、地域とテーマがうまく出会っていないため、もしくはどちらかのみが機能しているためであると考えられます。そこで、本研修では、コーディネーターが事業に関わるステークホルダーにとって魅力的なテーマ性をつくと同時に、特定の地域にこだわり地域の持続可能性というキーワードが浮かび上がってくる事業を展開できるようになることを目指していきます。現在、様々な地域でコーディネーターの働きをしている人びとに、改めて「持続可能性」というキーワードを認識してもらうためにも「地域とテーマの幸せな出会い」は大切なメッセージになっていくと考えています。

また、ESD は言葉や概念として認識してもらいにくいという傾向があります。ESD という言葉を知っている側からすると、人と人をつないで持続可能性をテーマにした事業を展開するコーディネーターは存在しているけれども、そのコーディネーター達は ESD という言葉は知らないということがよくあります。このような既存のコーディネーター達を ESD コーディネーター研修に参加してもらうとなると「ESD コーディネーター研修」という名前は広報上使いにくいということがあります。つまり、彼らにとって分かりやすい単語での研修名が必要であるということになります。そこで今回の ESD コーディネーター研修では、「地域コーディネータースクール」という名称で広報することになりました。こうすることによって、主に環境省や文部科学省の枠組みの中で ESD という言葉に触れてこなかった、まちづくりや中山間地域振興に関わるコーディネーターにも分かりやすく捉えられたと感じています。

2. 研修対象の工夫と組み立て方

漠然と「地域コーディネーターを養成します」という看板では広報が困難であることが予想されたため、まずはひろしまジン大学で活躍する事業コーディネーターを対象として想定しました。彼らの中には先に挙げた課題を抱えている方もおり、強い関心を持つ方も数多くいると感じていました。彼らを基軸にさらに、フューチャーセンター、中山間地域振興に関わる NPO 関係者、公民館関係者、中国環境パートナーシップ職員等幅広い参加者に直接呼びかけて参加を促しました。このように、募集対象を具体的に絞り込んでから呼びかけていくことはコーディネーター研修の広報としては必要な手続きではないかと考えています。

地域コーディネータースクール（広島）の内容イメージ



また、具体的な参加者像が見えたところで、彼らの動機を高めるようなゲスト発表者を選定していきました。今回は特に、地域性とテーマ性のバランスをとりながら活動をしている実践者として、高知のNPO法人砂浜美術館から村上健太郎理事長に発表して頂くことにしました。砂浜美術館では有名な「Tシャツアート」の他にも、地域の調味料を見直すプロジェクト「さしすせそ計画」などいずれも、地域の資源を活用しながらデザインやテーマ性に富んだ事業を展開しています。今回の「地域とテーマの幸せな出会い」というテーマにはぴったりの題材です。

3. 研修企画の中身と工夫

今回のESDコーディネーター研修の与件としては、コーディネーターの現場で実践しながら研修効果を検証していくOJT(On the Job Training)型で行うということが挙げられます。そこで、今回は左下の図のように3回の集合研修(第1回:オリエンテーションと企画/1泊2日、第2回:企画の発表と共有/1日日帰り、第3回:実施した企画の評価/1日日帰り)とその間にOJTを入れて行う方法としました。OJTの間にはサロンと称する主催者側との相談会、Facebookグループによる情報共有、および相互の実践現場視察をフォローアップとして行っていくことにしました。

研修全体の目標としては、「ESDの視点がない、もしくは意識化されていない参加者(コーディネーター)が、ESDを自分の言葉で捉え自らの活動に活かすことができる。」を設定しました。また、第1回目の集合研修の目標としては、1)ESDの視点が盛り込まれた企画書を書くことができる。2)お互いから刺激を受け視野が広がる。3)合宿感覚でやる気が高まる。の3点を設定しました。第1回目の集合研修の中ではESDの概念にも触れ、「自分たちの地域で未来に残したいことは何か?」という問いを考えながら、各参加者が実践していく企画を考えるという内容にしました。また、これまでいろいろな形でコーディネーターの現場を踏んできた参加者同士で用語の使い方の共通認識を持つためにも、企画やプログラムデザインといった内容の講義も行いました。



河野 宏樹 (こうの ひろき)

環境教育事務所 Leaf 代表。学校、企業、自治体、公益法人等との協働を通じて環境・平和・国際協力を中心とした教育事業を行なうとともに、参加体験型学習のプログラム開発や指導者養成を行なっている。NPO法人これからの学びネットワーク理事、NPO法人ひろしまジン大学理事も兼務。

4. 第1回集合研修の成果

第1回集合研修は20名の参加者が参加しました。当初想定していた参加者層が呼びかけによって参加しました。様々な地域性やテーマ性を持ち寄り、個人もしくはチームで企画の種を作っていました。その結果、「選挙と民主主義」「公民館と中間支援組織との連携事業」「中山間地域での子ども向けプログラム開発」「地域での葬儀」「子どもキャリア教育」「小規模商店街のマルシェ」といったタイトルの企画が練り上げられてきました。企画を作成する過程でチームの離合集散がありましたが、各コーディネーターが最善のパフォーマンスを発揮するためには必要な過程と考えています。

5. 課題と今後に向けた動き

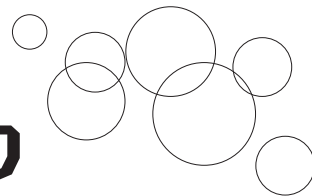
原稿執筆時点ではこれから第2回集合研修がはじまるところです。この形の研修では、個人での企画が多ければ多いほど、主催者側での企画の確認が煩雑になる欠点があります。限られたマンパワーの中で企画を確認・修正し、よりよい研修結果がでるよう、参加者と主催者側とで調整していくことが必要とされます。また、日々の業務で多忙なコーディネーター達の進捗を確認しながら、研修期間内での成果を出せるよう臨機応変に声かけしていくことが主催者側に求められていると感じています。研修期間を終え改めて報告する機会にまた、全体を通じての課題や改善案を記述したいと考えています。



一言コメント (編集長: 森 良)

地域で既に活躍しているコーディネーターを中心に顔やニーズの見えるターゲットが絞られていて、その対象にESDの視点(この場合、「地域性とテーマ性の良い出会い」)を考えてもらっている点が大きな工夫であろう。企画の内容をより深めるには、もう一つ「過去ー現在ー未来をつなぐ」という視点を組み込んではどうだろうか。地域の過去から学び未来を構想するという視点である。この点で小・中・高の子どもたちの学びとの連携の可能性も出てくる。地域づくりの企画が深みと広がりを持てるようなさらなる工夫を期待したい。

埼玉にひろがる 地域コーディネーターづくり



2012年1月に開催した「ESD 関東学びあいフォーラム」をきっかけに、埼玉の2地域に、コーディネーター研修が広がっている。ふじみ野市は人口10万人、日高市は人口5.7万人でいずれも池袋から1時間以内、武蔵野台地に新しくつくられた団地と古くからの住民が混住していて、これから新たなアイデンティティづくりが求められる地域だ。コーディネーターの役割は大きい。

〈ふじみ野市〉市民が地域コーディネーターにチャレンジ！

2012年9月から11月にかけて3回にわたり「ふじみ野地域コーディネーター育成講座」が開かれ、19人が修了した。修了後、市民たちは2ヶ月に1回OB会を開き、今年のはじめに団体名を「つながりタイズ」とし、現在市が直営している市民活動支援センターの運営に指定管理者として参加するという方向を検討している。

この講座のきっかけは、「ESD 関東学びあいフォーラム」に参加したふじみ野市民に対して、関東のESD-J理事から地域コーディネーター育成をやってみないかとの働きかけが行われたことである。それを受けたふじみ野の市民が10団体に呼びかけて市民・学生による実行委員会をつくり、市の了解を得つつ参加型で開催にこぎつけた。

このふじみ野市民のチャレンジの意味は大きい。いま全国の自治体で中間支援組織がつくられつつあるが、その多くはコーディネーターが不在であったり、経験が少なかったりする。ふじみ野では、①市民同士が立場を超えて地域のビジョンを話しあい共有していくこと、②それぞれが関わっている活動の分野を超えてつなげ地域づくりに発展させていくこと、③それらのコーディネートを既存のセンターを活用して市民が担っていくこと、これら三つをしっかりとやろうとしている。

〔つながりタイズ〕

前身は“ふじみ野地域コーディネーター育成講座実行委員会”。環境、福祉、川づくり、自治会など多様な市民活動家の連合体で、「埼玉都民をふじみ野市民に変えたい」との強い情熱を持った20人前後の集団。

〈日高市〉公民館が12人の地域コーディネーターを養成

ふじみ野の講座を見学に来た日高市の公民館職員からの要請で、2013年6～7月、4回の「地域コーディネーター養成講座」の企画と講師を担当した。こちらは行政主導で、参加者も日高市内6公民館の館長の推薦であった。

といっても熱心な方ばかりで、それぞれしっかりした地域づくりの問題意識を持っていた。例えば、入り口としては、①あいさつ、コミュニケーションを豊かに、②住民に問題意識を持ってもらう、③サロンづくりや人材についての情報を得る、といったものから入り、活動の目標としては、①一人暮らしの老人をサポートしあう、②郷土愛を育む、③安全・安心・笑顔のまちをつくる、といったゴールを掲げ、具体的活動としては、地域で子どもを育てる、お年寄りの出番と居場所をつくる、といった内容である。

具体的活動をつくっていくためには、今回修了した12人の地域コーディネーターが、各公民館で仲間を募って地域課題を探究する講座をつくっていくのが一番いいだろう。この秋にはOB会（その後の報告会）も行われるそうである。

〔日高市公民館〕

日高市教育委員会生涯学習課が管轄する6つの公民館から成る（西から武蔵台、高麗、高麗川、高麗川南、高萩北、高萩）。

今後、さらなる広がりにつなげていきたい。（森 良）



認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

http://www.esd-j.org/ e-mail: admin@esd-j.org

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-38-5 日能研ビル201

TEL: 03-5834-2061 FAX: 03-5834-2062

編集: ESD-J『未来へつなぐ』制作チーム レイアウト: 河村久美



この印刷物は、平成25年度地球環境基金の助成を受けて制作されています。



この印刷物は、適切に管理された森林の認証木材から作られた紙と、輸送マイルージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。